

ビルマの王都マンドレー

大 野 徹*

Mandalay, the Royal City of Burma

Toru OHNO*

Mandalay is the second largest city in Burma, with a population of approximately four hundred thousand. It lies at 21°59' N and 96°6' E, and occupies part of a plain which stretches about thirteen kilometres from the Irrawaddy on the west to the Shan Hills on the east, and from the Madaya river on the north to the Mitnge river on the south. This rectangular area was designated "*Shwe-gyo-that-ne*," the Royal City Area.

Mandalay was founded by King Mindon in 1858 as a new capital. The shift of capital from Amarapura to Mandalay seems to have been made for mainly political and partly private reasons on the king's part. Following victory in the Second Anglo-Burmese War, the Governor-General of India unilaterally annexed the Province of Pegu with its ports of Rangoon and Bassein without concluding a peace treaty. Mindon seized the bloodstained Crown from his brother Pagan in 1853. To erase the humiliating disasters and to distract the attention of his people from their gloomy memories, he resolved to move his capital.

Mandalay was designed basically on the same plan as the preceding capitals of Ava and Amarapura. The Royal City, called "*Myo-daw*" in Burmese, was built in a square, nearly eight kilometres in circumference. It was enclosed by

a brick wall about eight metres high and two metres thick with the forty-eight bastions, which support the posts of the "*Pyat-that*," a many-tiered pavillion. The wall was pierced by twelve gates, three on each side. Outside the walls, a deep moat was dug, seventy metres in breadth, which was originally crossed by five bridges.

The king's palace, called "*Shwe-nan-daw*" in Burmese, was in the exact centre of the square city. It is enclosed by a stockade of teak posts six metres high, then by a brick wall, and again by another brick wall. In the inner enclosure stands the palace, facing east. All the palace buildings stood on a platform of brickwork two metres high. These building were all built of wood, and had only one storey.

Roughly speaking, the eastern portion of the platform was reserved for official purposes, and the western half exclusively for the residences of the queens, princes and princesses together with their female attendants and servants. Facing the main eastern gate was the "*Mye-nan-daw*," which consisted of the Great Hall of Audience, South and North, and just behind it the Lion Throne Room, over which rose "*Pyat-that*," a grand seven-tiered spire. Behind this room was the "*Hman-nan-daw-gyi*," the Glass Palace, the principal living apartment of King Mindon.

The palace was not only the royal residence but also the centre of the kingdom. It is also said that the royal palace of Burma was regarded as the symbolic centre of the cosmological island of Mt. Meru. These palace buildings were, to my regret, burnt to ashes in bombing by the Allied Forces in March 1945.

* 大阪外国語大学ビルマ語学科; Burmese Department, Osaka University of Foreign Studies, P. O. Box 15 Minoo, 2734 Aomadani, Minoo City, Osaka 562, Japan

I ビルマの「むら」と「まち」

いまさら述べるまでもないことであるが、ある言語で使われている単語をほかの言語で言い表わした場合、その二つが表わしている意味は、常にまったく同等であるというわけにはいかない。表わされている概念は類似していても、細部については異なっていたり、双方の間に意味のずれがあったりするからである。

このことは、「むら」や「まち」、「みやこ」といった単語についてもあてはまる。これらの単語に相当するビルマ語は、ywa と myo と myo-daw である。けれども、それは、ywa=むら、myo=まち、myo-daw=みやこということでは決してない。この三つの単語につけられた等符号=は、相似符号≐におき換えた方が、より現実に近いことになると思われる。

同じ言語の中においても、単語のもつ意味は時代によって変わる。ビルマ語の ywa と myo とを、現代と王朝時代とに分けて考えてみると、ほぼ次のようになるようである。

現在のビルマには、ywa に 2 種の存在が認められる。一つは「自然村」とでもいうべき ywa で、自然に形成された集落を指す。こうした ywa は全国で約 6 万 7 千あり、1 郡内に 100 から 200 あるのが普通である。当然のことだが、人口にもかなりの開きがある。小さな ywa の場合は 200 人程度、大きな ywa になると 1,000 人は軽く超す。その平均はだいたい 540 人といったところ。

Kyeywa oksu は、これらの ywa をいくつかまとめて行政上の一つの単位にしたものである。いわば、自然村に対する「行政村」といった立場にある。行政上の単位であるから、そこには、住民の選挙によって選出された代表で構成される「村落人民評議会」が設

置されている。こうした行政村は全国に約 1 万 3 千あり、一つの郡に 30 から 60 あるのが普通である。人口は 1,000 人から 3,000 人程度の規模になる。

一方、myo は、人口、面積ともに ywa より大きいことが第 1 条件であり、第 2 に ywa とは別の行政単位であることが必須条件になっている。英領時代のビルマでは、myo は、1907 年制定の法律によって myo と認められたものだけに限られていた。この場合の myo は、日本語の「町」にあたる。これらの myo には自治権が付与され、一定の範囲内で租税を徴収することが認められていた。1907 年制定の法によれば、myo の資格は人口が 1 万人以上であることが条件であった。

ところが、myo の中には、時代とともに急速に発展し、人口も 10 万を超えるようなところまで現われるようになった。ラングーン、マンダレー、モールメイン、バセイン、ペゲーなどがそうである。こうした myo は、日本語でいえば「市」に相当する。しかし、ビルマ語には「町」と「市」を区別する基準はない。「町」も「市」も、ともに myo である。

ビルマには現在 356 の myo がある。これらの myo のうち、ラングーン、マンダレーなどいくつかの myo-gyi (大きな myo) を除くと、myo は、一方では myo-ne (郡) の中心地という性格ももっている。Myo-ne は全国で 314 あるが、各 myo-ne にはそれぞれ住民によって選出された代表で構成される「郡人民評議会」が設けられている。

Myo と ywa とのもう一つの違いは、myo には郡人民評議会の実務を司る任命制の官吏が配置されているが、ywa には行政の実務を担当する官吏は配置されていないという点である。Myo に配置されている官吏は内務省の役人で、myo-ne の行政を受けもつ ne-bain (郡長) と、その下にあつて ne-bain

よりは狭い範囲の地域を担当する myo-bain (町長) とがある。

王朝時代すなわち英領化(1885年)以前のビルマにおいては、ywa と myo とは次のようになっていた。Ywa は、人家十数戸ないし数十戸で形成されており、人口は十数人から数十人の範囲内にあった。人口が少ない場合、その ywa が血縁社会であったことは疑いないが、人口の多い ywa でも相互に婚姻を通じて複雑な親族・姻族社会が形成されていたとみられる。村民は、ywa-thugyi と呼ばれる村おさの支配下にあり、戦争の時には ywa-thugyi の指揮に従って従軍した。Ywa-thugyi は、まれに譲渡されることもあったが普通は世襲制で、その交替に際しては国王の承認を得ていた。

一方、myo は、人家の数が百数十戸から数百戸に及び、人口も少ないところで数百人、多いところでは千数百人を数えた。Myo は人家が密集した単なる集落ではなく、その周囲を myo-yo (土塁) で囲繞された防衛的構造をしている点に特徴がある。もっとも、ywa も、下ビルマの河川沿いに発達した線状集落を除けば、上ビルマの場合は例外なく塊村であり、その周囲には ywa-siyo (垣根) が張りめぐらされていた。ただし、この場合の垣は有棘性の植物を密植した生け垣であって、外部からの侵入は極めて困難であるが、myo の場合のような土塁ではない。

Myo の住民は、ywa の住民ほど同質的ではなかったが、一般に同一身分、同一職種の者が多く、その統括も特定の myo-thugyi によって行われていた。Myo-thugyi も、ywa-thugyi 同様、世襲制であったが、職種や身分によって呼び方がいく通りもあった。例えば、歩兵を指揮している場合は thwethauk と呼ばれ、騎兵を指揮している場合には myinzi と呼ばれていた。Myo には myo-thugyi 以外に、myo-wun が配置されている

こともあったが、myo-wun は任命制の官吏で、通常複数の myo を支配し、その中で行政権と司法権とを行使した。Myo-wun は総督あるいは太守に相当する官職で、王都の奉行と同じ権限・職掌を有していた。各 myo の myo-thugyi たちは、この myo-wun の支配下にあった。

II ビルマ語の「みやこ」と、 たび重なるその遷都

住民が多数居住し、堅固な土塁で外敵の侵入を防ぐ myo と、基本的には同じ構造をしてはいるものの、国王が住むという点において他の myo とは根本的に異なる myo、それがビルマ語の myo-daw である。Myo-daw は、従って、日本語の「みやこ」に相当する。ビルマの myo-daw は、中部ビルマのタウングー、南部ビルマのペグーにあった16-17世紀の一時期を除くと、パガン、ピンヤ、ザガイン、インワ、シュエボー、アマラプーラ、マンダレーと、もっぱら内陸部(いわゆる上ビルマ)にあったこと、何カ所もの土地を点々と遷都していることを、特徴としている。

こうした遷都が、なぜ行われたのかという点について、ビルマ語の王統史は、かならずしも納得のいく合理的説明は与えていない。例えば、1783年にボードーパヤー王(1781-1819)によって行われたアワからアマラプーラへの遷都について、コンバウン朝歴代国王の事跡をまとめた『コンバウンゼツ大王統史』[Maung Maung Tin 1967 (Vol. 1): 545-546] は、次のように述べる。

「予が王位に就けば、ティーパウンカの地に新都を建設して遷ろうと思う。建設予定地を実地調査せよと仰せになり、宰相、宰相補佐らをティーパウンカの地へ赴かせ、実地調査にあたらせた。——中略——釈尊

が地方巡錫の折、ンガ・タウンダマン、ンガ・タウンチー、ンガ・タウンビョン、ンガ・タウンミンという4匹の羅刹が肉飯を差し上げたことから、羅刹の棲む土地が、後世、王都となるであろうとの啓示をお与えになった。——中略——ハンターワディー・スィンビュシン（1551-1581）の御世、ティーパウンカの地に都ができて栄えるであろうと、アラカン人の師、年齢80歳を超えるオウガソーデーが申し上げた。ハンターワディー・スィンビュシンが、予の在位中に実現するだろうかと問うたところ、100年か200年後にならねば実現いたしますまいと答えた。後世の人たちに分からなくなる惧れがある故、図と文書とを書き残しておくようにとの言葉があり、タウンダマン、タウンチー、タウンビョン、タウンミンというタウンのつく四つの地とともに、ティーパウンカの地を図と文書に書き残した。——中略——その地は、拘留孫仏の在世中はパターナムンディ、拘那含牟尼仏の在世中はダンマパッタ、迦葉仏の在世中はデーワパッティ、瞿曇仏の在世中はサンガーパッティと、4度名称が変わった。——中略——釈尊の啓示、昔の人の予言に合致している」。

ここで述べられている遷都の理由づけは、4匹の羅刹の善行に対する釈尊の啓示にしても、ハンターワディー・スィンビュシン（＝バインナウン王）による予言にしても、さらにまた、過去4仏在世中の地名の存在にしても、遷都の絶対的必然性を示すものではない。「新都を築きたい」、「新しい都に移りたい」という国王の願望ないしは意思が先に存在し、その願望または意思を正当化、絶対化するために行われた理由づけにすぎないという印象を強く受ける。

このアマラプーラから逆にアワへと再遷都したバヂードー王（1819-1838）の1821年の

遷都について、同じ『コンバウンゼッ大王統史』[Maung Maung Tin 1967 (Vol. 2) : 311-313] は次のように述べる。

「御先祖たちは、ダガウン、タイエーキッター、パガン、ザガイン、ピンヤなどに王都を築いた。その後、ピンヤ朝のスィンビュー・ダズイーシン（＝ティーハトゥー王、1312-1324）は、御先祖たちが築いた都は王都としての条件を具備していない、気に入らないとて、ラタナープーラ（＝アワ）となるべきところに城を築こうとしたものの吉日に恵まれず、止むを得ずその南にピンヤ城を築いた。その後、ダガウン王統の血をひくタドーミンビャー（1364-1368）の治世になって、時節に恵まれ、アワ城が築かれた。（今度は）完成した。そのようにビルマ人たちが初めて輝いた優れた恒久的地であるが故に、ニャウンヤン王（1597-1605）も、祖父君スィンビュシン（1763-1776）も、故郷を棄てて、ラタナープーラを都としたのであった。——中略——ラタナープーラ城のある、河中に剣のごとく突き出た土地は、城の北をイラワジ川が流れ、東をサモン、サマー、メッカヤー、パンラウン、ドウタワディー、この5河川が合流してイラワジ川に注いでいる。城の南側、西側も、ミッター川がとり囲むように流れたのち、イラワジ川に注いでいる。——中略——予が治世に、大僧正や婆羅門の導師、祭師、学識者らが、ラタナープーラに王都を新設すべき時期が至ったことを、予言や古文書を添えて述べている。御先祖たちの治世に提出された大僧正たちの上呈書、予が治世に提出された大僧正や婆羅門の導師、祭師、学識者らの上呈書に沿って、ラタナープーラ・アワに新しき都を造営し、そこに予は住む」。

この場合も、遷都の必然性を示す理由は何も見出せない。先人たちによって築かれた都

はいずれも「王都としての条件」を具備していないという指摘は、既成の王都が気に入らないことから出てきた意見であって、説得力に欠ける。ニャウンヤン王やシンビュシン王がラタナープーラすなわちアワを王都にしたことは、この地が四方を河川に囲繞された天然の要塞であって、王都として地の利を得ていることの証明にはなっても、アマラプーラからアワへの遷都を決定づける理由にはならない。

ミンドン王(1853-1878)によるアマラプーラからマンダレーへの遷都について、『コンバウンゼット大王統史』[Maung Maung Tin 1968 (Vol. 3): 240-242] は次のように記している。

「六牙象の雌雄1対を入手した曾祖父君は、マンダレーの陰を頼って、タウンダマンの近くティーパウンカの地に新たに王城を造営になり、アマラプーラと名づけて、ラタナープーラ・アワ城から移り住まわれた。このように王城を新設なさったものの、曾祖父の治世に、マンダレー、仏紀2400年にはなっておらず、予言や運星の因果、時期がいずれも合致していない。予が治世において、運星の因果、予言、時期すべてが合致する。よって、予は、マンダレーの予言に基づき、マンダレーの地に御仏の教えが一層広まり、すべての身分の人々が幸せに暮せるようになることを意図して、マンダレーの地に都を新築して移り住む」。

以上の記述からうかがえることは、マンダレーについての予言があったこと、その予言に基づいてアマラプーラが築かれたこと、しかしそのアマラプーラの築城は予言や運星の因果とは時期的に合致しないとされていることなどである。つまり、ボードーパヤーによるアワからアマラプーラへの遷都は「マンダレーに関する予言」に基づいて行われたもの

であったことが、ここで初めて明らかにされている。ボードーパヤーが築いた新都はアマラプーラと命名されたが、本来そこは「マンダレーの予言」で築城されたわけであるから、「マンダレー」と呼ばれても不思議ではなかったということになる。

それはともかく、仏紀2400年を記念する形での遷都であれば、ボードーパヤーのアマラプーラ遷都が時期的に合致しないことは事実である。ビルマでは西暦紀元544年をもって釈尊入滅の年としている[大野 1971: 21-22] から、仏紀2400年といえは西紀1856年になる。ミンドンが即位したのは1853年であるから、仏紀2400年はその3年後に訪れる。従って、予言の時期からいえば、ミンドン王の治世において遷都してこそ初めて合致するという主張は正当なものといえる。

それにしても、合理的根拠のない予言を遷都の理由にしているが、この場合その予言は次のような二つの事柄からなっていた。その一つは、釈尊の教え(sāsana)は、pu—pa—sa—wa—ma—ta—ka—ka—nga といった土地で栄える[Shwe Kain Tha 1959: 33]。これら単音のビルマ文字は、具体的には次のような土地を表わしている。Pu=Pugan, pa=Pinya, sa=Sagain, wa=Inwa, ma=Mandalay, ta=Tagaung, ka=Kaungton, ka=Kaungzin, nga=Ngahsaunggyan。これらの土地は、いずれもイラワジ川沿いに点在しており、マンダレーに都ができて栄えることを意味する。予言の第2は、仏紀2400年に火曜生まれの国王が新都を造営する、そこでは教法が盛え、王権は47代にわたって続く[Than Tun 1968: 49] という点である。因みに、ミンドン王の出生曜日は火曜日、ボードーパヤー王のそれは月曜日であった。従って、マンダレーに新都を築くべき王はミンドンであり、アマラプーラはしよせんアマラプーラであって、マンダレーではないという

ことになる。

いずれにせよ、王統史の中に遷都の必然性を探し求めることは、やはり不可能といわざるを得ない。従って、国王が遷都を決意するに至った真の動機が何であったのかということを知ろうとすれば、当時の社会的、政治的状况を丹念に調べて、その中に埋没している真因を探り出すしかない。

では、ミンドン王がマンダレーを都と定め、そこに王城を築き、遷都した真の動機は何だったのだろうか。即位に先立つ過去数年間の主なできごとを列挙してみると、次のようになる[Great Britain Parliament 1852-1853: 1-170; Lawrie 1885: 81-256; 大野 1981: 202; Woodman 1962: 122-170]。

1851年6月 英国船 Monarch の船長 Sheppard, パイロット殺害の罪でハンターワディー太守に拘置され、罰金900ルピーを課せられる。

1851年9月 英国船 Champion の船長 Lewis, 乗組員殺害の罪でハンターワディー太守から罰金150ルピーを課せられる。

1851年12月 インド総督 Dalhousie, ハンターワディー太守の更迭と賠償金9,948ルピーの支払いを要求して, Lambert 提督指揮する軍艦3隻をラングーンに派遣する。

1852年1月 ハンターワディー太守の罷免を約束するビルマ国王の書簡が, インド総督に届く。

1852年1月 ハンターワディー新太守, ラングーンに着任。

1852年1月 Lambert 提督, 賠償要求の使節を太守のところへ派遣するが, 面会を拒否される。

1852年1月 Lambert 提督, ラングーン港を封鎖しビルマ国王の御用船を拿捕する。

1852年1月 ダラ太守, 英人船長事件に関し9,948ルピーの支払いを約束し, 国王御用船の即時返還を提督に要求。

1852年2月 Lambert 提督, 賠償金100万ルピーを要求し, 国王に最後通告を送る。

1852年4月 最後通告の期限が切れる。英軍, ハンターワディー, シリアム, マルタバン, バセイン各港を占領する。第2次英緬戦争開始。

1852年12月 インド総督, ペゲー地方の併合を宣言する。

1853年1月 Godwin 將軍, 領土併合をビルマ側に通告する。

1853年1月 和平派の王弟ミンドン, カナウンの両王子, 王都を脱出して交戦派の国王に謀叛を起こす。

1853年2月 両王子配下の部隊がアマラプーラを包囲する。

1853年3月 アマラプーラ陥落。パガン王廃位され, ミンドンが王位に就く。

1853年3月 ビルマ使節団, 英軍に対し領土割譲の不同意を通告する。

1853年6月 ミンドン王, 英弁務官 Phayre に停戦を申し入れる。

1854年3月 ミンドン王, ビルマ軍部隊に撤退を指令する。

1854年3月 インド総督 Dalhousie, ビルマ側に領土割譲の条約調印を要求する。

1854年12月 インドに派遣されたビルマ使節団, ペゲー地方の返還を要求するも拒否される。

1855年8月 英弁務官 Phayre, ミンドン王に面会する。ミンドン王, 領土条約の調印を拒否する。

これらの事実から, 次のようなことが指摘できる。

(1)ビルマは1852年の英国との戦争で敗北し, 海に面したペゲー地方を一方的に英領

化されて内陸部に閉じ込められた。

(2)ミンドン王は、兄である前国王をクーデターで倒し、骨肉争う戦闘の末、王位に就いた。

この二つの事件がビルマの国内に大きな衝撃をもたらしたであろうことは想像に難くない。ことに、ミンドン王は戦争によって奪われたペゲー地方をとり戻すことに力を注いだ。それはもはや不可能であった。敗戦という衝撃に加えて、海に面した肥沃なペゲー地方まで接収されるという痛手を蒙ったのである。沈滞した士気を昂揚し、民心を一新するには、起死回生的な、斬新な策を実行する必要があると考えられたであろう。

先代の国王パガンは、インド総督の強引ともいえる挑発を受けて、結果的には英国と戦争をせざるを得ない立場に追い込まれたが、この一事を以てパガンは好戦論者、ミンドンは和平論者と単純に図式化することはできない。一般に、王統史（あるいは年代記）を含めて後世の歴史書には、権力の座にあった者を常に正当化し美化する傾向があるが、コンバウン朝の歴代国王の事跡を編年体にとめた『コンバウンゼツ大王統史』の記述をみる限り、英国との停戦、和平を主張するミンドンが、徹底抗戦に固執するパガンに対抗してクーデター決起に踏みきったなどとは書かれていない。もちろん、そのような要素がまったくなかったとはいいきれないが、兄の国王とは肌の合わないカナウン侯が、すぐ上の兄ミンドンを唆してふたりで組んで謀叛を起こしたというのが真相のようである。当然、国王は追討軍を派遣した。追討軍と、両王子を支持する地方の部隊との間では、各地で戦闘が行われ、おびただしい犠牲者を出した。敗北の責任をとって追討軍の指揮者ひとりが自殺したり、アマラプーラ城の攻防で国王軍を指揮した司令官（王弟のひとり）が戦死するなど、骨肉相喰む戦いは現実には多くの

血を流した戦闘であった。そうした観点からすれば、血で汚された古い王城にそのまま居座る気持は、ミンドンにはなかったであろう。一刻も早く王都を去って新都へ移りたいというミンドンの気持は、新城の着工と同時にマンダレーの地に移り、そこに仮御所を建てて自ら工事の指揮をとったことに現われている。

以上のほか、限られた面積の王都に過度に人口が集中することに伴う都市問題の根本的解決という視点も、遷都を促進する要因の一つとしてとり上げる必要があるかもしれない。しかし、そのためには、王城の面積とそこに勤務している人数、王都の面積と人口、消費される食糧の量とその供給、排泄物や塵芥の処理能力、疾病とその対策など、当時の王都の実態を解明しない限り、臆測の域にとどまらざるを得ないだろう。

Ⅲ マンダレーの造営工事

マンダレーの都がどのような工事によって造営されたかということについて、『コンバウンゼツ大王統史』の中から、必要と思われる部分を編年体で抜粋すると、次のようになる。

1856年10月 仏紀2400年を記念して、マンダレーに新都を造営せよとの勅命が下る。

1856年10月30日 元老、元老補佐、枢密官ら40人を新都予定地に派遣し、実地調査を行わせる。

1857年1月3日 元老、元老補佐、枢密官ら10人を新都予定地に派遣し、象を放って王城の位置を選定させる。

1857年2月1日 北はマンダレー山麓、南はマハムニ・パゴダ北の土塁、南東はアウンビンレー湖の堤、西はシュエタチャウン水路に囲まれた範囲内の土地

を、人夫2,000人を動員して伐採させる。
 1857年2月15日 三宝, 帝釈天, 四天王, 仏法守護神などに供物を供えたのち, 人夫3,000人を動員して, 王城, 宮殿, 濠などの杭打ちを行わせる。
 1857年3月14日 王城の西北隅に仮御所を建設。
 1857年7月2日 新都造営工事を監督するため, 国王, マンダレーの仮御所に移る。
 1857年10月26日 国務院 (hlutdaw) の穴掘り, 柱建て。
 1857年11月2日 仏牙台, 時刻鐘台の工事開始。
 1857年11月6日 新御所建築用の材木に鉋を掛ける。
 1857年11月23日 新御所造営用の板を鋸でひく。
 1857年11月27日 三宝, 帝釈天, 梵天, 四天王, 護法神などに供物を供えたのち, 御所の造営にとりかかる。
 1857年12月4日 新御所の礎石工事。
 1857年12月25日 新王城, 新御所に埋めておく, 呪術用の数字を彫り込む金属板 (inbya) の製作。
 1858年1月5日 アマラプーラ城の祖霊殿に安置されている歴代国王の黄金像を, 元老, 元老補佐, 枢密官らが奉じてマンダレーへ運ぶ。
 1858年1月16日 御所および玻璃殿に屋根をとりつける。
 1858年1月27日 新御所の八方において比丘たちが護呪經 (paritta) を読誦。
 1858年1月28日 御所, 玻璃殿, 多層楼閣の各個室の杭打ち工事。
 1858年2月23日 新御所の南東, 南, 南西に柱を建てる。
 1858年2月25日 御所, 玻璃殿, 多層楼閣の各個室の柱建て工事。

1858年3月2日 各建物の柱の切込み, 組立て工事。
 1858年3月4日 玻璃殿, 多層楼閣の屋根工事。
 1858年3月22日 新御所, 玻璃殿の梁, 桁の工事。
 1858年3月27日 新御所の四隅の祠に安置する神像に入魂。
 1858年4月18日 門, 城壁の礎石工事。
 1858年4月20日 御所の四隅の祠, 御所の扉, 門などの下に, 呪文表の金属板を埋める。
 1858年5月7日 御所内の9御殿に玉座を設置する。
 1858年7月16日 御所の建物, すべて竣工。
 1859年4月28日 マンダレーの市街地建設の勅命が下る。
 1859年5月15日 マンダレー城の四隅に穴を掘り, 煉瓦と漆喰とで固めたのち, 黒ゴマ油40, 白ゴマ油40, ナタネ油40, 計120を入れて密封した大甕を埋める。
 1859年5月22日 王城, 城門, 楼閣などの柱を建てる。
 1862年3月 王城と濠および宗教用建造物5カ所 (クトードー・パゴダ, アトゥマシ僧院, 戒壇, トウダマ宿坊, 経倉) の工事落成。

以上の諸工事の中で注目をひく点は, 占星的, 呪術的要素が少なからず見受けられることである。王都の造営工事は, 原則として1782年のアマラプーラ造営, 1821年のアワ造営の先例に従って行われた。このことは, ミンドン王のマンダレー造営勅命の中にもはっきり述べられている。それと並行して注目されるのは, 次の事柄である。(1)王城および御所の位置を選定するのに象を使い, その象が立ち止まったところを建設予定地に決定している。(2)工事着工に先立ち, 仏法僧の三宝の

ほかに、帝釈天、梵天、四天王などヒンドゥー系の仏法護法神に供物を供えて、工事落成を祈願している。(3)あらゆる工事の開始時刻がすべて時分秒（ビルマ時、すなわち chetti—nayi—pad—bizana—pyan—hkaya）まで細かく定められている。(4)工事に従事する労務者はビルマ語で nekyawtha と呼ばれ、国王の誕生日と曜日を同じくする者に限られている。Nekyawtha 以外にも、工事人夫は出生曜日ごとに分けて使われている。例えば、御所や王城の杭打ちをする時には張り渡した綱の根元を土曜生まれの者、先端を日曜生まれの者にもたせ、整地作業は火曜生まれの者にさせている。また、御所の建築材の枝払いや鋸びき作業には木曜、金曜生まれの者に従事させ、各御殿の杭打ち工事は日曜、月曜生まれの者に行わせている。(5)方角や移動の向きに一定の定めがある。例えば、起工の際の整地作業では8頭の牛に右回りに土を掘らせているし、竣工の時には国王が御所の外を右回りに回ったのち、入城入御している。また、御所の基礎工事では最初、人夫を西の方に向かせたのち、南西に向きを変えさせた上でとりかからせ、工事用の釘を作る時には南の方を向かせて作らせ、御所や王城の地下に埋める神像を彫刻させる時には東の方を向かせて彫らせている。こうした方向の重視は、その時点における「竜の向き」(naga hle) と関係があるものとみられる。竜(naga)は一定の間隔をおいて向きを変えるが、竜に向かい合う方向でものごとを行うと竜の口の中に呑み込まれてしまい失敗するから、竜の向きとは交叉する形で行うのが安全とされている。(6)城の四隅に油入りの甕を、御所の四隅や門、木柵などの真下に数字を刻んだ呪術用の金属板を埋めている。これが何を意味しているのかよく分からないが、従来いわれている生きた人間を人柱として埋めた [Directorate of Archaeological Survey 1963: 15-17; Fou-

car 1946: 16; Gascoigne 1896: 122-125; Shway Yoe 1927: 481-482] ことは、王統史の記述では確認できない。

人柱を立てるということはよほど興味をひいたようで、マンダレーに関する英文文献の大半でとり上げられている。しかし、その記述はどれも似たり寄ったりで、先人の記述をそのままひき写すか、孫びきをただけのものである可能性が強い。その要旨は次のようになっている。人柱を立てるということは、仏教受容以前のビルマの考えである。ビルマ人の中には、殺害、処刑など正常でない死に方をした人間の霊は、成仏せず怨霊となつてこの世にとどまるという考えがある。ことに、城壁の四隅や門の下に生き埋めにされた人間の霊は、守護霊(nat-htein)となつて外敵の侵入を防ぐ。マンダレーの築城に際しては、12の門に3人ずつ、四隅にひとりずつ、御所の出入り門にひとりずつ、御所の木柵塀の四隅にひとりずつ、玉座の下に4人、男女老若合わせて52人が人柱にされたというのが、その内容である。もっとも、これに対しては、そうした事実があったかどうか疑わしいとする見方もある [O'Connor 1907: 6; Than Tun 1968: 85-90]。油入りの甕や呪術用の数字を刻んだ金属板を埋めることも、攘災としての性格をもつものであろう。

IV 王 都 圏

マンダレーという場合、それは、三つの概念のどれかで使われるのが普通である。その第1は、国王の住む御所、王城を中心に、その外部に形成された市街地と、さらにその外側に広がる空間までを含む、王都の全域を指す。ここは、その域内であらゆる生き物の殺生が禁じられていたから、その範囲を示す「黄金の綱を張りめぐらせた区域」(ビルマ語 shwe-gyo-that-ne) という言い方で表わさ

れる。

第2は、この王都の中であって、濠と城壁とに囲まれ、その内側に御所を抱える王城で、ビルマ語では myo-daw という言葉で表わされる。第3は、国王の住居としての宮殿、すなわち御所を指し、ビルマ語では nan-daw という別の言葉で表わされ、王城とは区別される。

王都圏すなわち「黄金の綱を張りめぐらせた区域」を具体的に知るには、現存する境界石柱と、そこに刻まれている碑銘が参考になる。境界石柱は、マンダレー市の北24キロの地にあるマダヤー町の北を流れているイエータノウ川の畔のペイタカートウ墓地や、バテインヂー郡シュエザヤン村のポーカラー仏塔の境内

などにある。表現にごくわずかの違いがあるだけで、記述内容はほとんど同じである。

「黄金の綱を張りめぐらせる」、すなわち王都圏の実地測量は、1856年10月30日に行われた。この時定められた王都圏は、ポーカラー仏塔境内の東北隅にある1857年2月13日付の境界石柱の碑銘によると、次のようにな

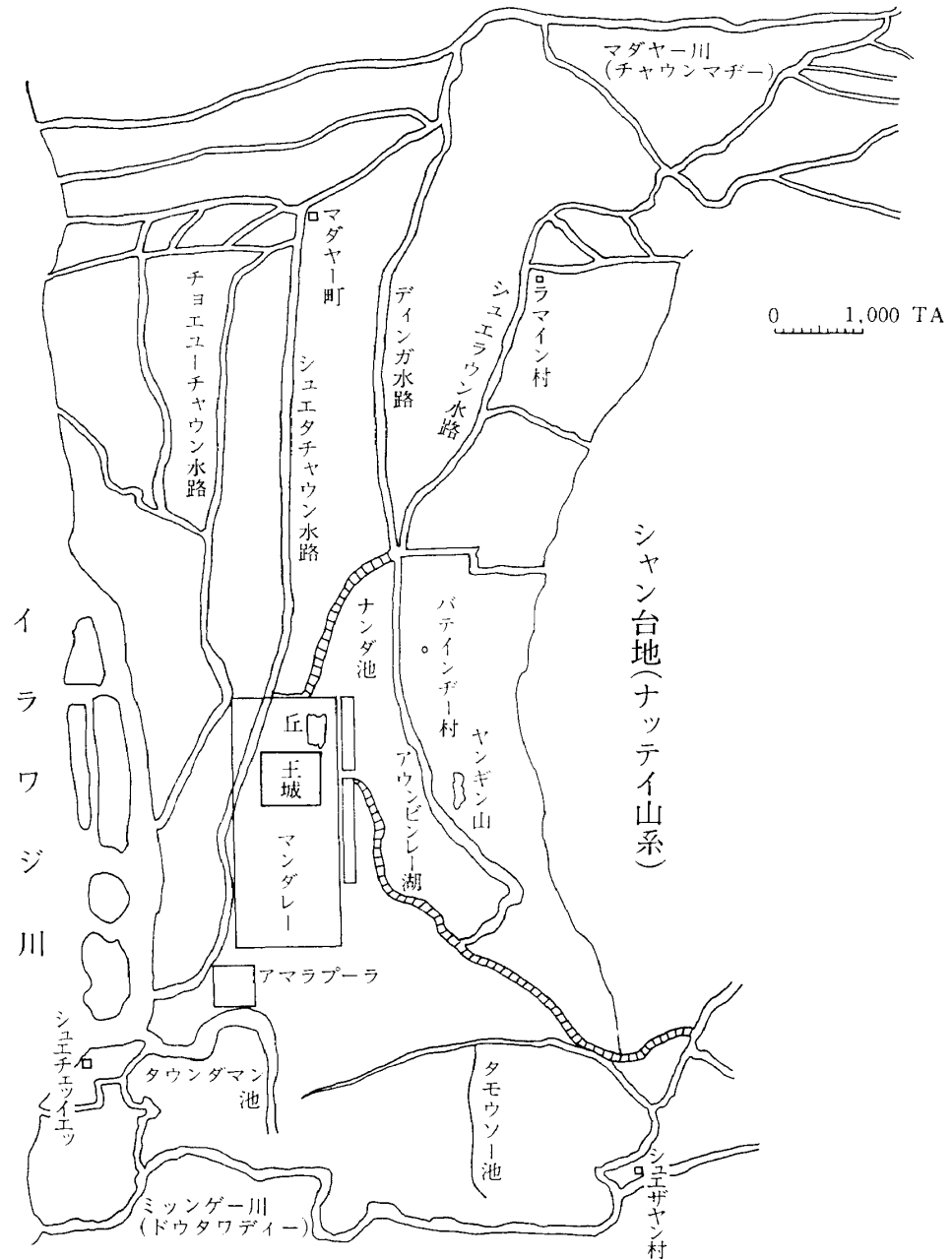


図1 王朝時代のマンダレーの見取図 (Maung Maung Tin & Morris [1966] より作成)

る。

「仏紀2400年、緬紀1218年緬曆11月黒分5日、2時鐘 4 nayi 2 pad 6 bizana 3 pyan 零 hkaya に標識石柱を建てて表示する。マンダレーの王都圏。南東はシュエザヤン・パゴダ、東はタンバヤーとミッンゲー川との合流点、ミッンゲー川の北岸

まで。対岸のメッカヤ地方と境を接す。そこから西へはミッンゲー川北岸の水際に沿う。王都圏の南西隅はミッンゲー川とイラワジ川との合流点、ミッンゲー川の北岸まで。そこから北へはシュエチェッチャ・パゴダまでイラワジ川東岸に沿う。ピーロンアンフローガーザ島、インドー島、シャンガレー島、コンダー島西の水際沿いにイラワジ川東岸のタイエッフモーまで。そこから北へはイラワジ川を渡りマーラカー島、アラウン島の西側の水際沿いにイラワジ川東岸のライン島まで。そこから北へイラワジ川東岸に沿う。王都圏の西北隅はイラワジ川とマダヤー川とのナッパウの合流点、ポーワミャウ村。その対岸ンガシングー地方と境を接す。そこから東へマダヤー川、ナッパウ南岸に沿う。マダヤーチャウシータイ地方とンガシングー地方との境界に沿う。王都圏の東北隅はマダヤー町のナッコンカニャウンチャウン村まで、マダヤー町域の端まで。そこから南へ山嶺に沿う。西側の山裾に沿う」。

ここに示された王都圏を、現存する当時の地図 [Maung Maung Tin & Morris 1966: 34; Than Tun 1967: 388, 390] と照合してみると、「黄金の綱を張りめぐらせた区域」は、東はナッテイ山、南はミッンゲー川、西はイラワジ川、北はマダヤー川に囲まれた地域で、南北に長く、東西は狭い。面積は、東西の幅が約21キロ、南北の長さが51キロとして、約11万ヘクタール弱である。地形的には、東だけが山で、他の三方は河川に囲まれている。そこは平坦地で、その中に沼72、池23、河川12を包含する。言い換えると、マンドレー平野は灌漑稲作の適地であることを示している。当然、集落も多く、王都圏内には、現在のマダヤー郡、アマラプーラ郡の村落を含めて、当時235カ所の多きにのぼった。住民はほとんど例外なく農民であった。

V 王城の構造

現在、マンドレー市は、位置的には北緯21度59分、東経96度6分のところにあり、東のシャン台地と西のイラワジ川との間に横たわる幅およそ13キロの平野の一角を占める [Wright 1910: 368]。平野のほぼ中央に高さ290メートルの丘があるが、その丘の南西の裾、イラワジ川からは約2キロ半離れたところに王城がある。

王城は正方形をしており、外周を煉瓦と粘土で組み立てられた城壁で囲まれている。王城の外周は、仏紀2400年を記念して、2,400taの長さがある。このことは、言い換えると、城壁の1面が600 ta あることを意味する。

1 ta は7肘尺 (tong) に相当するが、1肘尺は約48センチであるから、ほぼ3メートル30センチ強の長さを表わす。従って、600 ta とはほぼ2キロになる。従って、王城の面積は400ヘクタールあるという計算になる (実際には、東西の城壁の長さが1マイル2フェーロングであるのに対し、南北は1マイル2フェーロング88ヤードと、ほんのわずかが長い)。

城壁には、全面に胸壁が設けられている。城壁の高さは地上から22フィート6インチ。胸壁は4フィート6インチあるから、城壁の地上高は約27フィート (およそ8メートル) になる。厚みは地上 (低辺) 部で10フィートあるものの、上部ではその半分の4フィート10インチしかない。銃眼の大きさは2フィート9インチ。弓矢や刀剣で戦っていたころならともかく、銃や大砲が使われるようになった19世紀の城砦としてみるならば、実際の効果はあまりなかったとみられる。

王城の門は、各面に3門ずつ、計12門あった。城壁の上には、望楼と尖塔とが等間隔で48設けられていた (マンドレーでは、距離を

示すのに、いまでも、尖塔から次の尖塔までの距離を基準に、1 pya, 2 pya という表わし方をしている)。

城壁の外側は濠で、幅は225フィート(約70メートル)、深さは11フィートあった。その上に橋が五つ架けられていた。南、北、東に一つずつと、西に二つである [Fytche 1878: 251]。濠へは、アウンビンレー湖の水が導入されていた(現在はマンダレー水路から導入)。

当時の見取図 [Than Tun 1968: 92] によれば、各面が12等分され、王城内は144の区画に分けられていた。そのうち、中央の16区画(45ヘクタール)は御所とされ、御所西北の4区画が皇太子の住居、残り124区画は王妃、王子、王女、元老、文武百官らの住居に割り当てられた。建物の配置としては、御所の東に元老院、民事、刑事の法廷、監獄などがあり、南東には造幣局、さらにその南東には先王パガンの住居や兵器庫、南西隅に電信局、西側には女官法廷や監獄、西北には皇太子の住居、北には精米所が、それぞれあった。

マンダレーは、旧都アマラプーラとその前の都アワをモデルに造営されたが、アマラプーラの王城は次のようになっていた [Sangermano 1893: 67; Symes 1800: 394]。

王城の位置はイラワジ川の東岸で、その前の都アワからおよそ15キロ離れていた。王城は1辺が1マイルの正方形で、城壁に囲まれていた。城壁は煉瓦と粘土とで組み立てられていた。門は、正門が各面に一つずつ、正門の両脇に通用門が一つずつで、合計12門あった。城壁の四隅からは方形の稜堡が突き出ている。この城壁の内側に、砦がもう1層あり、その中央に御所があった。建物はそのほとんどがチーク材を用いた木造建築であった。王城は、その北側がイラワジ川に面し、南側には広大な沼地が広がっていた。東西には深い濠が設けられていた。

アマラプーラに先立つ旧都アワの王城は、次のようになっていた [Crawford 1829: 119-120, 132; Gouger 1860: 26-27]。

王城は、北でイラワジ川、東でミッンゲー川に面する位置にあった。王城は、その周囲を高い煉瓦造りの城壁と濠とで囲まれていた。城壁の上には胸壁が設けられていた。城壁の総延長は、5ないし6マイルに達する。城内の東北隅には煉瓦の城壁がもう1層あり、その内側に御所があった。城壁には全部で21の門があり、各門にはそれぞれハンターワディー、ヨーダヤー、モウタマといった名前がつけられていた。王城の外側は、西と南とはほとんど無人であったが、東と北(城壁と川との間)には人家が密集し市が設けられていた。御所は、木柵と煉瓦造りの城壁とに囲まれていたが、東部では城壁が二重になっていた。出入り口は3カ所設けられていた。御所は木造で、屋根は錫で葺かれていた。屋根は、ビルマ語で pyat-that と呼ばれる多重の尖塔形式をしていた。

以上の記述から、次のような事実が判明する。ビルマの王都は、河川を利用して築かれている。王城は、濠と城壁とによって囲まれている。御所は木造で、その周囲を煉瓦の城壁や木柵で二重、三重にとり囲まれている。このような構造上の特徴は、そっくりそのままマンダレーにもひきつがれた。

VI 御 所

マンダレーの御所は、王城の中央、高さ6フィート9インチ(2メートル)の煉瓦製土台の上に建てられていた。形は、東西が1,000フィート(300メートル)、南北は574フィート(175メートル)と、東西に長い方形をしていた。この基礎の上に建てられた建物の数は166棟で、それらの建物全体を称してビルマ語で nan-daw という。

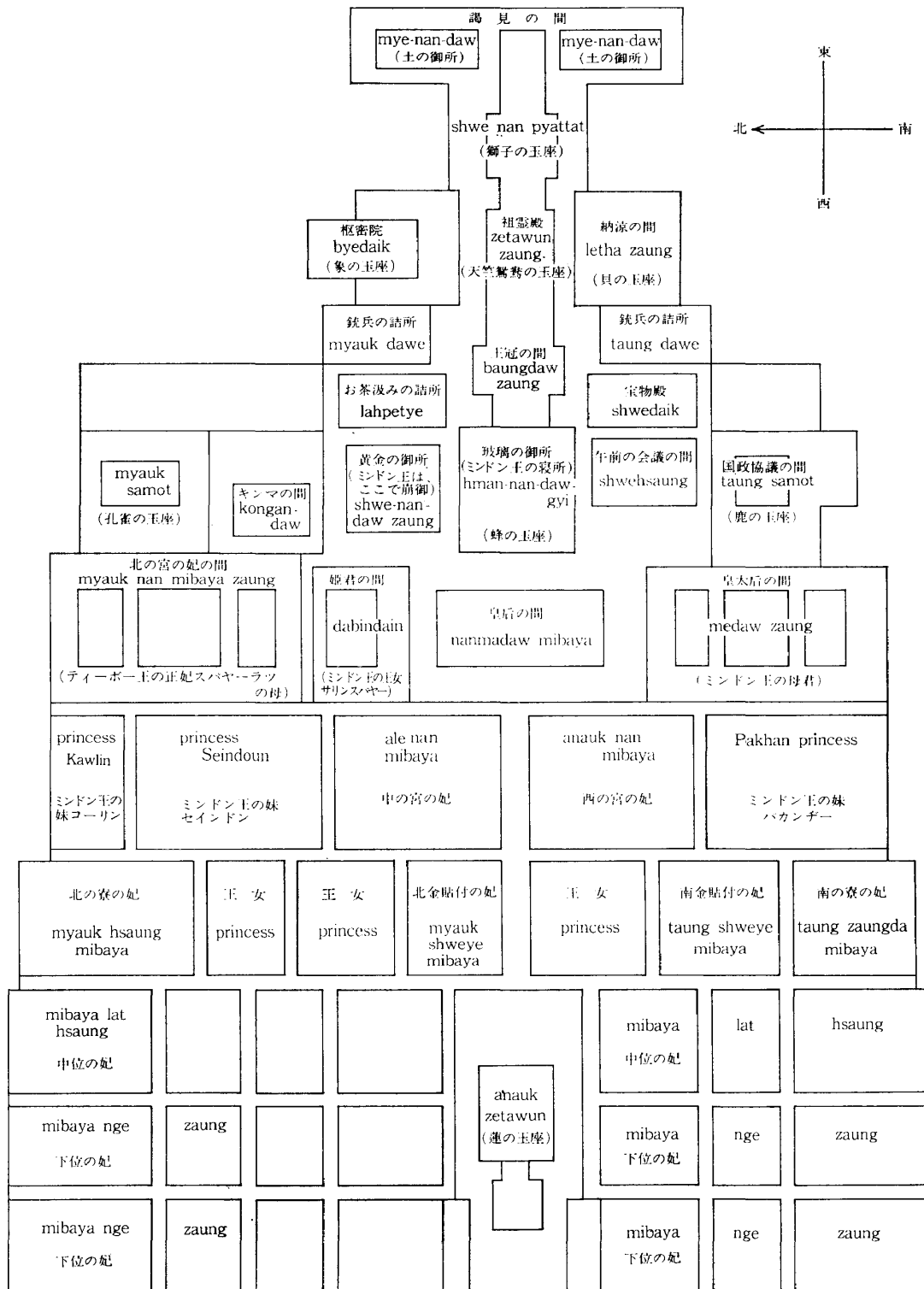


図2 マンダレー御所の見取図 (O'Connor [1907], Shwe Kain Tha [1959] より作成)

御所の建物は、形状はさまざまだが、すべて木造で、平屋建てが特徴。屋根は多重屋根だが、瓦屋根ではなくトタン屋根であった。

これらの建物の壁や柱、軒などには彫刻が施され、玻璃象嵌と金貼付とがなされていた。煉瓦土台の上に建てられたこれらの建物の

うち、一番東にあった建物は「土の御所」(mye-nan-daw)と呼ばれ、謁見の間であった。東の正門から中に入り、時鐘台と仏牙台との間を通過して御所に向かった場合、最初にみえる建物である。国王に拝謁する広間は、「土の御所」の左右に1カ所ずつあり、その中央の奥に「獅子の玉座」があった。この特徴は、屋根が七重の尖塔になっていたことである。その真後ろ(西側)は「勝利の間」(zetawun zaung)と呼ばれ、「天竺鴛鴦の玉座」があった。ここは「祖霊殿」で、歴代国王の黄金像はここに安置されていた。勝利の間の北側は「枢密院」(byedaik)で「象の玉座」があり、南側は「納涼の間」(letha zaung)で「貝の玉座」があった。勝利の間の真後ろは「王冠の間」(baungdaw zaung)と呼ばれる。王冠の間の北側は「茶の間」(lahpetye zaung)、南側は「宝物殿」(shwe-daik)であった。王冠の間のさらに奥にあったのが「玻璃の御所」(hman-nan-daw-gyi)で、ミンドン王の寝所であった。ここには「蜂の玉座」があった。玻璃の御所の北隣は「黄金の御所」(shwe-nan-daw zaung)と呼ばれ、ミンドン王はここで崩御した。玻璃の御所の真後ろは「皇后の間」、その北隣は「姫君の間」、皇后の間の南隣は「皇太后の間」で、皇后の間の西側の建物はその他の妃や王女たちの間であった。

以上の事実から、煉瓦土台の上に建てられていた建物は、東半分が公務関係の建物、西半分は王妃や王女たちの住む大奥というように、大きく二つに分かれていたことが分かる。大奥へは、国王のほか、医師、僧侶、女官奉行ら特定の者を除くと、男性は立入り禁止であった。なお、御所に出入りする時は丸腰であることが条件で、武器の持ち込みは禁止されていた。

この御所の構造そのものが、仏教的宇宙観の中心をなす須弥山を象徴しているという意

見もある[Cady 1958: 7]。これは、国王が神であり、国王の居所は神々の座である忉利天を表わしているという考えによる。御所が選ばれた正方形の土地の中央に位置しているのはそのためであり、御所の警護にあたる禁衛4個部隊(win)は須弥山の四方を守護する四天王を模しているとみる。

VII マンダレーの住民

マンダレー王城の建設は1857年2月に始まり、1858年7月には完成したが、市街地の建設は王城竣工後1年経った1859年5月に始められ、完成したのは1874年6月になってからであった。15年もの歳月を費やして行われた大事業であったといつてよい。

ボードーパヤー王がアワからアマラプーラに遷都した時の王都の人口は20万人とされる[Sangermano 1893: 68]が、ヤンダボー条約に基づく駐在官として1830年から37年までアワにいたBurneyの推計によれば、アマラプーラの人家は13,844戸であったから、1戸あたりの家族数を平均7人と計算しても、総人口は9万6千にしかない[Burney 1941: 22]。一方、ミンドン王のマンダレー遷都に伴ってアマラプーラからマンダレーへ転居した住民は15万人[Marks 1917: 147; O'connor 1907: 6]とされるが、この場合も人口は徐々に減少し、ティーボー王治世の1884年、王女の穿耳式を参賀奉祝した市民の数は10万人強にすぎなかった[Maung Maung Tin 1968 (Vol. 3): 665]とされる。1884-1885年のマンダレー市街地の人家の数は18,428戸であった[Scott & Hardiman 1900: 419 (pt. 1, Vol. II)]から、Burneyの場合1戸あたりの平均家族数を7人とすれば、人口は12万8千人強となる。一説によれば、6万5千であった[Fytche 1878: 252]ともいう。

いずれにせよ、ビルマの王都の人口は10万人を若干超える程度であったとみられる。これに対し、王城内の人口はどれぐらいあったのだろうか。まず、王族の人数であるが、王妃が50人、王子52人、王女56人、孫83人で、計241人。次いで王城内の勤務者が31,939人（このうち、26,639人は軍人）。両方合わせると32,100人ということになるが、この中には家族は含まれていない。18世紀から19世紀にかけてのビルマの平均家族数は3.5人であった〔大野 1972: 53〕から、王城勤務者の場合もそうであったと仮定すれば、約11万人。これに市街地居住者12万人を加えると、マンダレーの人口は23万から24万程度はあったとみられる。因みに、英領化されたのちの人口は、1891年で18万8千、1901年で18万3千人であった〔Searle 1928: 74〕。

参 考 文 献

- Burma, Directorate of Archaeological Survey. 1963. *The Mandalay Palace*. Rangoon: Ministry of Union Culture.
- Burney, Henry. 1941. On the Population of the Burmese Empire. *Journal of the Burma Research Society* XXXI-i: 21-33.
- Cady, John F. 1958. *A History of Modern Burma*. Cornell U. P.
- Crawford, John. 1829. *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Court of Ava in the Year 1827*. London: Henry Colburn.
- England, Great Britain Parliament. 1852-1853. *Papers Relating to the Hostilities with Burma*. London.
- Foucar, E. C. V. 1946. *They Reigned in Mandalay*. London: Dennis Dobson.
- Fytche, Albert. 1878. *Burma, Past and Present, with Personal Reminiscences of the Country*. London: C. Kegan Paul.
- Gascoigne, Gwendolen Trench. 1896. *Among Pagodas and Fair Ladies, an Account of a Tour through Burma*. London: A. D. Innes.
- Gouger, Henry. 1860. *A Personal Narrative of Two Years Imprisonment in Burmah 1824-1826*. London: John Murray.
- Lawrie, W. F. B. 1885. *Our Burmese War and Relations with Burma*.
- Marks. 1917. *Forty Years in Burma*. London: Hutchinson.
- Maung Maung Tin, Wundauk. 1967 (Vol. 1; Vol. 2); 1968 (Vol. 3). *Konbaungzet Maha Yazawindawgyi*. Vols. 1-3. Rangoon: Ledi Mandain. (Burmese)
- Maung Maung Tin; and Morris, T. O. 1966. Mindon Min's Development Plan for the Mandalay Area. *Journal of the Burma Research Society* XLIX-i: 29-34.
- O'Connor, V. C. Scott. 1907. *Mandalay and Other Cities of the Past in Burma*. London: Hutchinson.
- 大野 徹. 1971. 「パガン, ピンヤ, インワ時代のビルマ人仏教徒の功德」『東南アジア研究』9 (1): 19-45.
- . 1972. 『ビルマの社会と経済』アジア経済研究所.
- . 1981. 「コンバウン時代のビルマ留学生」『東南アジアの留学生と民族主義運動』永積昭(編), 197-227ページ所収. 東京: 巖南堂.
- Sangermano. 1893. *The Burmese Empire. A Hundred Years Ago*. Westminster: Archibald Constable.
- Scott, J. George; and Hardiman, J. P. 1900. *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States*. Rangoon: Government Printing.
- Searle, A. F. 1928. *Burma Gazetteer, the Mandalay District*. Rangoon: Government Printing and Stationery.
- Shway Yoe. 1927. *The Burman, His Life and Notions*. London: Macmillan.
- Shwe Kain Tha. 1959. *Ahnit Taya Pyi Mandalay*. Mandalay: Kyipwayay. (Burmese)
- Singhal, D. P. 1960. *The Annexation of Upper Burma*. Singapore: Eastern Universities Press.
- Symes, Michael. 1800. *An Account of an Embassy to the Kingdom of Ava Sent by the Governor-General of India in the Year 1795*. London: Bulmer.
- Than Tun. 1967. Mandalay Myebonmya. *Sapay Sadan 1328*. Mandalay: Kyipwayay. (Burmese)
- . 1968. *Nehle Yazawin*. Vol. II. Rangoon: Nantha Taik. (Burmese)
- Woodman, Dorothy. 1962. *The Making of Burma*. London: The Cresset.
- Wright, Arnold. 1910. *Twentieth Century Impressions of Burma*. London.